

桂雀々さんの落語会「地獄八景亡者戯」を聞く

2010年11月14日(日)、旧野殿童仙房小学校体育館において、桂雀々さんの落語会「地獄巡り」が開催されました。上方落語の伝統を磨きつつ、新たな笑いを追求している桂雀々さんは、50歳を迎える今年、1時間を超える演目「地獄八景亡者戯」(絵本「じごくのそうべい」でも知られる地獄巡りの話)を引っさげて、全国各地を回って落語会をしてきました。この日は野殿・童仙房などから老若男女70名余が集まり、にぎやかな笑い声に包まれた素晴らしい一日を過ごすことができました。今回は、スタッフとしても参加してくれた中国人留学生の宋佳さんの感想を掲載します。



言葉の壁を超えて——中国人留学生の感想より

宋佳 SONG Jia
教育学研究科 修士1回生

六年前インターネットで日本の落語を初めて聞いて、その素朴で洗練された^{はなし}噺に魅かれて、ぜひ一度生の落語を日本へ聞きに行こうと思っていた。そして、五年前の東京浅草でその願いが叶った。

2010年の秋、京都府の野殿・童仙房で生の落語を楽しむ機会を再びいただき、大変うれしかった。この度は桂雀々さんの上方落語だった。雀々さんの『地獄巡り—地獄八景亡者戯』を聞いて、深く感動したところが二つある。

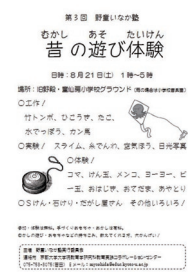
一つ目は、桂雀々さんの言葉と表現力のすばらしさであった。実は初めて生の上方落語を聞くので、すこし緊張していた。外国人である私が日本語をまだうまく聞き取れないうえに、言葉の技が満ちており、関西弁が飛びかう上方落語に、そのおもしろさを味わうことができるかを心配していた。しかし、私のような中途半端な外国人の落語ファンでもよく噺の内容を聞き取れて、思い切り大笑いした。わかりやすい言葉で、ぴったりの表情と身振りで、噺のおもしろさをちゃんと観客に伝えていた。そして本題に入る前に、雀々さんが日常話のような雑談(枕)をしたのも大変おもしろくて、観客との距離がぐっと縮まったと感じた。「さすが有名な噺家、細かいところに腕が見える」と感心した。



もう一つ感動したことは、野殿・童仙房の住民の参加とその雰囲気であった。いままで見ただけと違って、旧野殿童仙房小学校の体育館の舞台で高座が建てられて、広いホールで椅子とたたみの席が設置された。普通の寄席より地味であっても、寛いでゆったりとした空間であった。このような場合は雀々さん自身も初体験であろうか。住民たちの多くが家族と一緒に来ていた。おもしろいのは若い夫婦がまだ小さい赤ん坊もつれて来たことである。お年寄りもいれば若い人もいたことがすごく印象的だった。『地獄八景亡者戯』は古典作品であるが、その魅力も噺家と時代とともに長く流れていくだろう。寄席が終わってから、地域の住民に招待されて、おいしいイノシシのスープをいただいた。

笑いは世界中で通じる言葉である。文化の背景は異なっても、笑えるネタはそれほど変わらないと思う。そして、地域の住民たちと一緒に寄席を聞いて、一緒に笑って、自分もまるで野殿・童仙房の一部になったように感じられた。たいへんいい体験だった。

「野童いなか塾」チラシギャラリー



今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>
京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科
TEL：075-753-3075, URL：<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/>

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄／副会長 内藤芳男

2011年3月31日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター
「教育空間創造ユニット」
編集：前平泰志
編集協力：岡田光恵
制作：(株)松籟社

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.17

大地を踏みしめるように
見知らぬ土地を味わってみたいと思うとき
「地図」は格好の案内役だ

そこに四季折々の草花や生き物が描かれていれば 楽しい
今住んでいる人も歴史上の人物も一緒にとりまざって
いろいろな人の横顔が書き込まれていれば
もっと親しみを感じることができるだろう

歩きながら 時間と空間を超える地図をみんなで作ってみよう

そのような地図の発信は「土の便り」ということになるだろうか



2010 年度野童・童仙房活動報告

今年度の活動は「野童いなか塾」を中心に展開しました。この「野童いなか塾」立ち上げの経緯は地元への広報誌『風と雲の便り』15号に詳しく書かれていますので、活動の具体的な内容はそちらを読んでいただくこととして、ここではこれらの活動の趣旨を中心にまとめておきたいと思います。

歩きながら「地図」をつくる

これは一般的に言えることですが、すべての人が利用する国土地理院発行の「地図」は案外地元の人は利用しないようです。地図など利用しなくともよいほど、その土地に精通しているからだ、というのは全くその通りなのですが、それだけが理由ではありません。それはちょうど、車に備え付けられたナビゲーターの指し示す方向が、その界隈の道路を知り尽くしたドライバーにとってあまり役に立たないのと似ています。また、地元以外の人で、目的地に早く到着したいというのではなく、どんな人たちがどんな生業（なりわい）でどんな顔をしている人たちなのかとか、季節ごとに芽吹く草花にどんなものがあるのだとか、本当にその土地を知りたい、味わい尽くしたいと思う人にとって、なんと「地図」というのは無味乾燥なのでしょう。野殿や童仙房は、その土地全体がほとんど茶畑で占められ、わずかな道路をかるうじて見つけられるそんな地図から何かを得ようとする人は少ないのではないのでしょうか。

それよりは、地域の人が、地元以外の人に知ってもらいたいお薦めのスポット（地点）や、また地元以外の人にとっては、知っていたらとても便利なところ、また地元の人すら知らなかったスポットの発見と再発見があれば、その知を訪れる楽しみが二倍、三倍になることでしょう。「地図」はまた1年中の変化をみてとれないことが特徴ですが、地域は、本当は季節によって大きく変わっているはずです。そのような「地図」が作れたらいいなという思いが、地域散策をしながら「マップ」づくりをやってみるきっかけになりました。

野殿・童仙房の地域について、もっと詳しく知りたいという願いは、これまでこの地域にお世話になってきた京大側からも強く抱いていたことでした。私たちの活動は、個別の聞き取りのフィールドワークを除けば、旧野殿・童仙房小学校を中心とした半径数100メートルの範囲でしかありません。地域の人たちとお知り合いになるのに、寄り合いやイベントにだけに頼るのではなく、積極的に地域を歩いて、その土地を全体として眺め、そこに住む人と立ち話をし、木々の匂いに触れ、ときには兎や鹿や猪と出会いたいものだと思っていました。地域散策をしながらマップ作りを思い立ったのはそのような動機も見え隠れしているのです。

多様な意味を持つ「場」をつくる

「野童いなか塾」と銘打っていますが、そこであからさまな教育活動を実践しようと思っているわけではありません。この活動

の大まかな目標は、15号でも紹介したとおり以下の三点に集約できると思います。

- ①「体験をつうじた学びの場」～子どもたちの「生きる力」を引き出すような、「いなか」ならではの直接体験ができる場を創りたい。そしてその体験を通じた驚きや発見を、自分自身の関心や理解と結び付け、「知」として根づかせる場にしたい。
- ②「地域発見・地域づくりの場」～地域住民と大学や他地域から訪れた人が共に、地域の魅力に気づき、それを残していくような活動にしたい。またその発見した「魅力」を伝えてることで、「地域づくり」の場にもしていきたい。
- ③「出会いと交流の場」～子どもとおとな（年長者やお年寄り）、地域住民と訪問者たち、外国からきた人たちなど、様々な出会いが生まれ、互いの交流の中で、新たな発見や成長ができるような場を広げたい。

「野童いなか塾」に集う

第0回（プレ企画）は、とにかく周囲を歩いてみようということで、「童仙房地域散策」を行ないました。当初は、さしたる目的もなくぶらぶら歩きのつもりでしたが、茶摘み体験、馬の餌やり、野草観察など、想像以上の収穫があり、これまであまりお話しすることがなかった地域の人とも知り合いになることができ、思わぬ一日になりました。



第0回・野童いなか塾 童仙房での茶摘み体験

第1回の春の自然観察会は、NPO自然観察指導員京都連絡会の皆さんの協力を得て、小学校の界隈を歩きながら、そこで見つけた生き物や草花について説明してもらい、また学校に持ち帰って、クイズなどを交えながら楽しく学ぶことができました。「自然に学ぶ」はよく言われる言葉ですが、この学びもやはり「自然と遊ぶ」というリラックスした姿勢でないと、学べないものなのだ、ということを改めて気づかされたということでしょうか。

第2回は、「風と雲の広場」に組み込む形で行なわれました。「風と雲の広場」のテーマは、「手づくり村・ミニのどう～つくる×はたらく×まなぶ～」と題して、ドイツはミュンヘンですでに20年以上も続けられている子どもたちだけの小さな「共同体」づくりの実践を做ったものです。働きながら自分たちで運営するという、遊びと学びを融合させたこのユニークな試みは、今の子どもたちの環境には欠けたものでしょう。衣・食・遊（住）の世界はこのやさしい「共同体」への入門にあたります。もちろん、子どもだけでなく、大人も楽しめるワンダーランドにしたいという願いも込められています。「手づくり」とは手づくりのものを与える・与えられる、というわけではありません。自分で何でも作ってみるという意味です。この手づくりを支えているのが労働の報酬としての地域通貨「チャオ！」の存在です。（これは2007年の「広場」以来使われているものです。）

第3回の「野童いなか塾」は、「昔の遊び体験」という企画で、スライムや水鉄砲、紙飛行機などを自分で工作したり、おはじき、ヨーヨー、けん玉、コマ回しなどを使って遊びました。駄菓子屋さんが全盛の時代に子どもだった大人にとって、往時をしのぶ特別の感情からか、子どもより大人のほうが熱心だったという評が15号でも掲載されています。



第5回・風と雲の広場「手づくり村・ミニのどう」

第4回は、私たちが普段あまり行かない野殿にスポットを当て、「野殿散策」を行ないました。歴史のある地域にふさわしく、弁天池、福常寺、六所神社など見所満載の地域でした。私たちとはあまり交流があるとはいえないのに、そこに住む人たちも親しうに話しかけてくれる姿は印象的でした。

第5回は、「秋の自然観察会」で春にお出でいただいた自然観察指導員の方々に再度お願いして、アリジゴクや虫こぶ、ザトウムシなど都市にはなかなかお目にかかれない生き物の「冬に向かう」生態を観察する機会を得ました。

第6回は、桑子敏雄先生の集中講義の狭間をぬって、「ソバ打ち体験」を行ないました。

「空間の豊かさ」を問う

また講義のあとには、夜は、NPO法人環境文明21の方々と交えて、桑子先生を囲んでの座談会「空間が豊かであるとはどういうことか」というテーマで話をうかがいました。桑子先生のやさしく語る哲学の面白さと深さに聴くものすべてが魅了されてい



桑子敏雄先生と一緒に「ふるさと見分け」

ました（詳しくは『風と雲の便り』16号をご覧ください）。

「地獄巡り」を聞く

野殿童仙房生涯学習推進委員会主催で著名な落語家桂雀々さんをお招きして、「五十歳五十ヵ所落語会・地獄巡り」の独演会を開催しました。一時間半にも及ぶ「地獄八景亡者戯」の噺は、中味の面白さは勿論のこと、その語り口の面白さは、一緒に耳を傾けていた、日本語をわからない外国人にも好評でした。（前平泰志）

2010 年度 活動一覧
5月15日（土） 第0回・野童いなか塾「童仙房地域散策」
6月26日（土） 第1回・野童いなか塾「春の自然観察会」 協力 NPO 自然観察指導員京都連絡会
7月24日（土） 第5回・風と雲の広場（第2回・野童いなか塾） 「手づくり村・ミニのどう～つくる×はたらく×まなぶ～」
8月21日（土） 第3回・野童いなか塾「昔の遊び体験」
10月23日（土） 第4回・野童いなか塾「野殿地域散策」
11月14日（日） 桂雀々さん「五十歳五十ヵ所落語会・地獄巡り」 主催 野殿童仙房生涯学習推進委員会
11月27日（土） 第5回・野童いなか塾「秋の自然観察会」 協力 NPO 自然観察指導員京都連絡会
12月25日（土）～27日（月） 桑子敏雄先生集中講義 25日 座談会「空間が豊かであるとはどういうことか」 お話 桑子敏雄先生 ゲスト NPO 法人環境文明21 25日 第6回・野童いなか塾「ソバ打ち体験」
通年 研究開発コロキアム（大学院生）「ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究―野殿・童仙房地域におけるエコミュージアム活動をフィールドとして」

報道 8月5日NHK 京都放送局
「ニュース610・京いちにち」（午後6:10～7:00）
京特・シリーズ絆